

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)

県政の課題(テーマ)報告書

平成30年6月18日

山梨県知事 殿

氏名 竹川 寛
留学先 イースタン・ケンタッキー大学
留学期間 平成29年8月11日
~平成30年5月19日

1 研究の課題(テーマ)

グローバル人材のために必要な取り組みについて

2 概要

与えられた県政の課題(テーマ)の解決に導く考え方及び対応策等

グローバル化が進む中、日本だけではなく世界で活躍できる人材の育成が必要とされている。新やまなし教育振興プランにおいても、グローバル化の進行について言及されており、世界で活躍できる人材の育成が求められるようになってきた。そこで、どのようにして世界で活躍できるグローバル人材を育てるべきであるかを、私の10ヶ月の留学経験もとに考察していきたいと思う。

はじめに、世界で活躍できるグローバルな人材を育てるためには、世界の人と意思疎通ができる英語の習得が必要不可欠であると考え。日本でもその重要性が認知されつつあり、小学校において英語が教科化されるなどより高い英語力の育成に力を入れている。しかし、留学を通して、ほかの国からの留学生に比べて日本人の英語力は非常に低いと感じた。特に、話す・聞く能力に関しては、ほかの国に比べ、遅れをとっているように思われた。私は日本人の英語力、特に話す・聞くが伸び悩む理由として、日本人の多くが英語を「知識」として学んでしまっていることにあると考える。日本のこれまでの英語教育では、文法や単語の暗記に重点を置いてきた。そのため、私を含め多くの日本人は、文法はよく理解できるし、文章を読むのも比較的早いということが留学を通してわかった。しかし、話す・聞くに関してはほかの国の留学生よりも劣っていると感じた。文法や単語の学習に重点をおいているため、日本人の場合、英語を話したり聞いたりする練習が圧倒的に足りてないと思う。一方、多くの日本人以外の留学生のほとんどは、英語のドラマをみてそれを真似することで英語を習得しており、単語の暗記や文法の勉強にそれほど時間を割いてないと言っていた。さらに、彼らの話す英語は日本人が中学校や高校で習うような基本的な単語が多く、決して難しい表現を使っているわけではない。

これらのことから、より実践的な英語力をつけるためには、日頃から習った表現を話したり聞いたりする練習を多く行う必要があると留学体験をもとに考えた。

私が考える理想的な英語教育とは、まず教師が十分な英語力を保持し、日頃から積極的に英語に触れさせることが必要だと考える。日本の英語教員の英語力は非常に低いことが問題になっているが、それが日本人の英語力の低さ特に、話す・聞く能力の低さに直結していると考え。英語は日本語とは全く別の言語であり、日本語を訳した言語ではない。英語の言語体系を理解し、ある程度使いこなせる教師が英語を教えることでより英語らしい英語を子どもたちが学ぶことが出来ると思う。また、第二言語習得には、多くの時間と練習が必要であることに留学を通して気づかされた。外国語活動(英語科)以外でも積

極的に外国語教育との連携を図り、教育活動全体を通して、英語に触れる機会を増やすことが有効であると考える。例えば、小学校 6 年生の授業で英語科と社会科で連携を図り、日本の文化を外国に紹介する活動を取り入れること、あるいは、音楽科と連携を図り、英語の歌を練習してそれを保護者の前で発表する活動を取り入れることなどが挙げられる。これにより、子どもたちが英語に慣れ親しむことができると私は考えた。たくさんの英語に日常的に触れ、練習をすることで、英語が自然と身につく、英語に対する抵抗感も薄れていくと期待するのである。

ところで、英語力はグローバル人材に欠かせない要素ではあるが、英語を使いこなせるだけでは世界で活躍できる人材の育成は難しい。より大事なことは、英語はあくまで意思疎通するための道具であり、英語を使って何を伝えるかである。私はアメリカでの大学生活を通して、自己主張の大切を実感した。アメリカでは、自己の意見を持ち、それを共有することがとても重要だと感じる。私が受けたほとんどの授業はただ聞いているというよりも、ディスカッションやディベートが基本となっていた。ディスカッションやディベートに必要な知識はあらかじめ自分で勉強することが前提となっており、それらの知識を用いて授業内で意見交換をするのが一般的であると感じた。さらに、アメリカの小学校の授業を観察した際も、4 年生の段階で子ども一人ひとりがノートパソコンを持ち、それを活用しながら調べ学習をし、それをクラス全体で共有する姿が多く見られた。



アイオワ州の小学校で撮影したもの。ここでは、ノートパソコンは見られなかったが、小学 1 年生からパソコンを使っての学習を始めていた。

アメリカの教育では、知識教授というよりも知識をどのように活用するか、また子ども自身が何を考えるかにより重点が置かれていると感じた。そのため、多くのアメリカの学生は自分の考えを持ち、それを恥ずかしがらず、クラス全体に共有することができると感じた。一方、日本人の場合ほかの人の目を気にしてしまい、なかなか意見を共有できなかったり、テストはよく出来ても、コミュニケーションがうまくできなったりする学生・子どもが多いと感じる。自己主張をすることは、世界に日本のよさや自らの意見を伝えるためにも必要不可欠である。だからこそ、アメリカの教育現場のように子どもたちが主体性を持って学ぶことのできる環境を作ることが大切であると私は考えるのである。

ただし、日本とアメリカとの文化の違いに留意する必要がある。アメリカでは、自分は自分で守るという強い意識があり、そのために自分の意見を主張することは当たり前であ

り、たいした問題にはならない。一方で、日本は恥の文化と言われるように、人目を気にする傾向があり、それが自己主張を妨げている要因になる場合もある。しかし、人目を気にすることは他人を思いやることができる日本人の良い文化のひとつでもある。したがって、他人を思いやることのできる日本の文化を尊重しつつ、自己主張のしやすいクラス環境を作ることが大切であると私は考えた。教師は教えるだけでなく、子どもの意見を尊重し学習を支援する立場に回ること、そして自己主張をすることが良いことであると子どもに気づかせることが重要だと考えた。例えば社会の授業において、歴史的事実に関する絵画などを見せ、その絵の中で何が起きているか、なぜそれが起きたのか、そしてどのように対処すべきなのかを、当時の人の気持ちに寄り添いながら子どもたちに予想させる活動が挙げられる。それは、ただ歴史的事実を教えてしまうのではなく、クラス内で意見を共有しながら教えていくことを意味する。このような授業の在り方が有効であると考えた。こうすることで、子どもたちは自分の意見を持って授業に参加でき、それを共有する機会を作ることができると考えたのである。その際、発表した子どもやグループに拍手を送ったり、ほかの人の意見をしっかり聞かせるようルールを作ったり、自己主張をしやすい環境も合わせて作る。自己主張は良いことであるという意識を育てることが大切だと考えるからである。



こちらアイオワ州にある小学校で撮影したもの。ひとクラスは多くても20人弱で構成されている。一人一人の机はあるが、5人1組のグループに分けられている。写真から、協同学習が授業の基本になっていることが分かる。

アメリカという、言葉も文化も全く違う国で10ヶ月もの間過ごしたことは、自文化を客観的に捉える良い機会となった。日本で当たり前と思っていることも、世界から見れば決してそうではない。世界で活動・活躍するためには、他文化の人との協力が不可欠で、そのために英語力と自己主張は絶対に必要な要素である。早いうちから、英語に慣れ親しみ、自己主張をする喜びを覚えることで将来、世界でも活躍できるグローバルな人材の育成が可能であると考えた。私は生まれ育った山梨の地で、小学校教員としてグローバル人材の育成に貢献したいと考えている。留学で得た経験と英語力を生かし、小学校における英語教育を充実させ、自己主張のできる子どもの育成を目指していきたい。

3 添付書類

詳細について、図・表・写真などの資料も含めて A 4 縦版 5 枚以内にまとめて報告してください。

パソコン・ワープロの使用可（使用する文字は 12 ポイントとしてください。）